

藤井 潔  
Kiyoshi Fujii

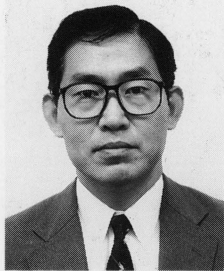
大学受験時に学友から「デザイン」という仕事を知らされ、千葉大学の工業意匠学科を受験していなかったら、今頃、何を仕事として生活していただろうか？と感じることが最近多々ある。昭和33年入学してから30年強、デザイナーとして企業に籍を置いてから27年。曲がりなりにもデザインを業務とした今日の自分があるとなると、大学の4年間の教育の重みを感じずにはいられない。そして今、日常の物造りを通じての企業活動に、大きな喜びと責任を感じている。

松戸の山の頂きの学び舎を懐かしむ暇も無く、明日の世界に思いを馳せさせている現役にとって、今回のIDCU-40への投稿の話は、日本のデザイン史以上に、自分史の中での「デザイン」を感じた。今にして思えば、薄くか弱い小冊子だった「工芸ニュース」が、授業以外からの重要な刺激であり、「工芸ニュース」を購読しているという事が、少なくとも将来のデザイナーを約束されているような気持ちで通学時にも持ち歩いていたことを、常磐線の沿線の田園風景と共に思い出される。

産業の発達は多岐に亘る分野へデザイナーを送り込み、根付かせ、デザイナー自ら活動の場をアメンバーのように増殖拡大していった。「工芸」という言葉の本来の意味が、近代産業、高度情報化社会の中で音を発てて花開く様を見る思いがする。欧米先進国の刺激を受けながら、高等工芸か

ら新制千葉大学工学部工業意匠学科へと脱皮していった如く、日本のデザイン教育の胎動とも連動し、時の教授人、諸先輩の方々の影響を強く受けながら毎年巣立っていったデザイナーの卵が、ひな鳥となり、おやどりとなる過程において、瞬時瞬時のときの声で、「工芸」から「デザイン」を分離させ産業、市場を活性化していった原動力となった。

現在の日本の立場から、また産業界に於けるデザイナーの役割として、輸出振興に大きな貢献をした過去の実績を鑑み、今こそ、日本の設計製造技術と躍動する市場をバックグラウンドとした新しいデザインの醍醐味を、世界のデザイナーに解放したいと思う。貿易収支のバランスが国際問題となる現在、「デザイン」こそ自由な交流の中で、物を離れた創造の喜びの世界で、自由経済のメリットと新しい文化の流れを作って行きたい。AV機器を担当していた時代に、イタリアのI.DE.A社へテレビのデザインを依頼した。AV機器は世界の隅々まで日本の商品、日本のデザインで埋め尽くされていると言っても過言ではない。それは日本のエレクトロニクスの技術に裏打ちされて初めて、我々デザイナーに檜舞台が与えられたからだ。今こそその檜舞台で世界のデザイナーが共存、共演し21世紀のデザインを試みるのも楽しいことではないか、と考えた。



梅原 伸浩  
Nobuhiro Umehara

